

英語と日本語の過去形の語用論

西山淳子

要 約

This paper studies the pragmatics of the past in English and Japanese, focusing on past stative sentences, whose interpretations differ between those languages. First, it shows that Japanese *ta* is a past tense form and does not have the meaning of the present perfect, based on the criteria suggested to distinguish the past from the present perfect. Second, it proposes that the different interpretations are based on two conflicting types of default inferences, Q-implicatures and I-implicatures. Stative sentences in the past are interpreted by default via I-implicatures in Japanese but via Q-implicatures in English. Finally, it explains why default inferences differ between English and Japanese past sentences, applying a Horn scale to the tense and aspect systems in those languages. The system of tense and aspect in each language structurally affects the type of default inferences available and hence the pragmatics of the past tense.

Keywords : 過去形, 日本語, 英語, 語用論的推論, scalar 分析

はじめに

多くの言語には、過去の事象（出来事、状態）を表す文法形式、つまり過去時制が備わっており、英語では動詞の過去形が、日本語では文の主節の動詞に付加される終助詞「た」がそれに相当するとみなされている。しかし、日本語の「た」と英語の過去形は、その解釈や使われ方に微妙な差異が見られる。例えば、例文 (1) a と b, (2) a と b に見られるように、英語では過去形よりも現在完了形や現在形が好まれる文脈（# は語用論的な不適格性を示す。）で、日本語ではしばしば「た」が使われることが観察されており、それらは「発見・期待」や「想起」の「た」とも呼ばれている（工藤 1995, 寺村 1984, 金子 1995）。

- (1) a. (ここに) あった。
b. It is here. (I've found it. / Here it is.)
- (2) a. 今日は休みだった。 (話者は朝、起きたばかりである。)
b. Today is/#was a holiday. ()

日本語の「た」と英語の過去形が共に過去時制の意味を持つとすると、なぜ同じ過去時制の

使われ方にこのような違いが起こるのかという疑問が生ずる。先行研究においても、このような語法の違いから、日本語の「た」には、過去形の意味だけではなく、現在完了の意味もあるとみなす立場と（寺村 1984, Ogihara 1999）、「た」は過去の意味しかもたないとする立場があった（Ogihara 1998）。しかし、いずれの立場においても、過去形と現在完了形を明確に区別することができる意味定義と基準が欠けており、記述的分析にとどまっている。

本論では、後述するように、英語と日本語の過去形では、解釈に伴う推論傾向に違いがあり、それが語法のちがいとなっていると考える。しかし、名詞や動詞のような内容語ではなく、過去時制のような文法項目の使用の際に、話し手や聴き手の世界知識や常識による影響で、日本語と英語で推論傾向の違いが生じ定着したとは考えにくい。このように、ある程度一般化が可能な傾向の違いが見られる場合、なぜその違いが生ずるのかについては、特定の語用論的文脈の違いに基づく解釈の違いとして処理するのではなく、何らかの体系的な説明が必要となる。

本稿では、まず過去形と現在完了形の意味を区別する根拠となる基準を示し、日本語の「た」が現在完了ではなく、過去時制の意味を持つことを明確にした上で、なぜ同じ過去形で、言語間の語法の違いが起こるのか、過去の状態表現に焦点をおいて明らかにする。とりわけ、その語法の違いは、英語と日本語の過去形の解釈の際に生じる二つの相反する推論、つまり、Q-implicature と I-implicature に基づく解釈を前提として生じた違いであることを示す。そして最後に、Horn (1984, 2001) の scalar 分析を両言語の時制・アスペクト構造に応用し、英語と日本語の過去形の解釈における推論パターンの違いを構造的な違いから体系的に説明する。

1. 過去時制としての「た」の検証

過去形と現在完了形はいずれも過去の出来事を談話に導入するという点で類似しており、会話で使われる文脈もしばしば重なるため、その区別は大変難しい。さらに、歴史言語学の研究では、「た」の過去形としての使用は、現在完了の意味から派生したものであるともしばしば言われており（鈴木 1992, 金水 1995）、「た」の意味に現在完了の意味がいまだに含まれていると考えたとしても、一見、なんら不自然ではないように思われる。実際、例文 (3a-b) に見られるように、日本語の「た」の英語訳には、現在完了形も広く使われ、英語の完了形もしばしば英語の過去形と置き換え可能である。一方、例文 (4a) のような「た」（所謂、発見の「た」）、あるいは、上記の (2a)（想起の「た」）の英語訳として英語の過去形を用いるのは、(4b) や上記の (2b) に見られるように、語用論的にはあまり適切ではない¹⁾。そして、このようなデータから、「た」は現在完了形の意味も持つとみなす研究もある（寺村 1984, Ogihara 1998）。それゆえ、本節ではまず、過去形と現在完了形を区別する基準を示し、「た」が過去時制であることを示す²⁾。

- (3) a. 鍵をなくした。
b. I've lost/ I lost my key.
- (4) a. (ここに) あった。(= (1))
b. It is/#was here. (I've found it. Here it is.)

これまでの研究で、現在完了形の意味は談話に過去の事象 (eventuality: event と state を含む) と現在の状態 (state) を導入すると広く論じられている (完了形状態説) (Galton 1984, Parsons 1990, Kamp and Reyle 1993, ter Meulen 1995, de Swart 1998, Nishiyama and Koenig 2004, Nishiyama 2006a, 2006b, 他)。それに対して、過去形は過去の事象のみを談話に導入し、現在に状態を導入しないとされる。それゆえ、もしも「た」が完了形の意味を持つなら、完了形状態説に基づいて、「た」文は現在の状態を導入しており、状態文の性質を帯びていなければならない³⁾。

文の状態性については、それを測る様々な基準が論じられているが (Bertinetto 1994, Mittwoch 1988, Herweg 1991a, Herweg 1991b, Michaelis 1998), それぞれの基準の適応可能性は構文によって異なる。英語の完了形の状態性を測る有効な基準としては、(i) 現在を表す時の副詞との共起可能性, (ii) 主動詞とその項による事象記述が出来事 (状態ではない) の場合の現在時制との共起可能性, (iii) when-節と共起する場合の時間順序の解釈, (iv) “seem to” との共起性, (v) “still” との共起性が挙げられる (Nishiyama 2006b)。これらの基準が日本語の「た」文にも当てはまるならば、「た」文は状態性を持つことになり、完了形状態説に基づき、現在完了の意味があるという結論になる。従って、以下において、それを検証する。

まず、基準 (i) は、「た」が現在完了形として現在の状態を談話に導入するなら、現在を表す時の副詞は「た」と共起し、その状態を修飾することができるというものだ。これは、状態のもつ distributivity (分配性 (訳は著者による)) の性質に基づくもので、ある特性を持つ状態のあらゆる部分はその同じ特性を持つ (Herweg 1991a,b, 他)。よって、状態は非常に短い時間に分割しても、つまり発話時間という瞬間でも、その状態が成立しているということができ、発話時間を意味する現在を表す時の副詞と共起することが可能になる。

さて、例文 (5) に見られるように、一見、「た」は現在の時の副詞「今」と共起し、条件を満たすように思われる。しかし、たとえば財布を失くしたのが5時間前であると、(5) は語用論的に不適格となる。もしも「今」が現在の状態を修飾しているのであれば、財布を失くすという出来事が5分前に起ころうと5時間前に起ころうと適格性への影響はないはずである。つまり、ここでの「今」は、英語の “just now/ a moment ago” に対応し、現在の状態を修飾しているのではなく、現在完了によって導入された少し過去に起こった事象を修飾していると考えられる。さらに「今」を、発話時間を表すもう一つの副詞「現在」に置き換えると (6) に見られるように、不適格文となる。よって、「た」文は基準 (i) を満たさない。

(5) 今、財布を失くした。

(6) *現在、財布を失くした。

次に、基準 (ii) は、出来事 (event) の現在時制との共起不可能性に基づいている。これは出来事の anti-distributivity (反分配性) という性質に基づくもので、これは、限界性 (telicity) をもつ出来事の出来事全体と一致しない一部の部分を取り出して、同じ出来事が成立したとは言えないという性質である。そしてたとえ、限界性をもたない (atelic) な出来事であってもその出来事が起こるためには最低限の継続時間を満たしていなければならない (Dowty 1979), 現在と

いう発話の瞬間の中で、出来事が起こる、または成立することができない。それゆえ、習慣やニュースキャスターの実況など特殊な文脈を除いては出来事は現在形と共起しない。一方、状態の場合は上記の distributivity (分配性) に基づいて現在時制と共起することができる。つまり完了の意味を持つ場合は状態が導入されるので、主動詞とその項で記述される事象が出来事であっても現在時制と共起可能となる。しかし、この基準を「た」に当てはめようとする、「た」が現在完了形という仮説は、そもそも「た」は完了形と現在形の portmanteau 形態素 (かばん形態素) であるという前提のもとにしかあり得ず、すると自動的に基準 (ii) を満たしてしまうことになるので、現在時制との共起性で状態性を測る基準 (ii) は無効となる。

基準 (iii) は、主節の事象記述が状態なら、同じ時制の場合、従属する when 節の出来事事象に先行するというものだが、「た」が現在完了の意味をもつとすると、このテストは現在時制で行わなければならない。しかし、先に述べたように出来事事象は現在時制と意味的に共起できないため、主節の「た」を現在完了とし、「～時」の節内を同じ時制の現在形で揃えることができない。ゆえに、この基準も「た」文に当てはめることはできない。

さらに基準 (iv) についても、日本語の seem to + 不定詞に対応する構文 (～ようだ) は後続する不定詞句の状態性について選択的ではないため、「た」の状態性を測るテストとしては不適當である。

最後に、基準 (v) について、“still” (譲歩の “still” を除く) は終了が期待される一時的な状態を修飾し、状態性の指標となる。例文 (7) のように、日本語「まだ」も一時的な状態と共起し、例文 (8) のように、完了の意味を持つ「ている」文と、さらに、“still” と共起する英語の完了形の文 (9a) に相当する「ている」文 (9b) においても共起する。一方、(8) と (9) の「ている」を「た」に置き換えると不適格文となり、いずれも「まだ」は「た」とは共起しない。ゆえに、「た」は状態性の基準 (v) を満たさない⁴⁾。

- (7) 顔がまだ青い。
- (8) 学生証をまだ失くしている /* まだ失くした。
- (9) a. Ken has still only FED the cat. (Michealis 1998 の例文より修正)
- b. ケンはまだ猫に餌やりだけしている /* 餌やりだけした。

このように、完了形文の状態性のテストとして「た」文にも有効な基準は、基準 (i) と基準 (v) であり、基準 (ii), (iii), (iv) は日本語の「た」文の状態性のテストとしては有効ではない。そして、その有効な基準 (i) と (v) を「た」文はいずれも満たさないことが、上記のテストの結果明らかになった。つまり、「た」文は、完了形の特徴である状態性を持たず、ゆえに完了の意味も持たないことが明らかである。以上のような結果から、日本語の「た」は過去時制の意味しか持たないと結論づけることができる⁵⁾。

2. 過去形における語用論的推論

前節では、日本語の「た」も英語の過去形と同様に過去時制であるということが明らかになっ

た。本節では英語の過去時制と日本語「た」の語用論的な差異について論じる。一般に過去形の状態文には二つの相反するタイプの推論が可能である。一つ目は、過去形で記述された状態が現在には当てはまらないという推論で、二つ目は、過去形で記述された状態が現在にも当てはまるという推論である。そして、発見の「た」、想起の「た」などとしばしば呼ばれる用法（寺村 1984, 井上 2001）は、この後者の推論に基づくものであり、さらに、英語の過去の状態文では前者、日本語の「た」の状態文では後者の推論がより強く生ずる傾向があるということが、以下に述べる観察からわかる。

下の例文（10）と（12）は、予定が決まった、或いは、地球の外観を知らなかった過去の時点の状態を表した過去の状態文と考えられるが、実際の用法では現在の状態を表すために使われる。もしも「た」に現在完了形の意味があるならば継続用法と考えられなくもないが、前節に示したように、「た」には現在完了の意味はない。これは、その過去の状態が現在も続いているという持続の推論（the inference of persistence）（McDermott 1982）を前提とした用法である。さらに、（14）や（16）のように、心理表現や実況中継的な文脈と共起する「た」についても、同様な推論を前提として、過去の状態文を使い現在の状態を表している。一方、これら日本語の例文に対応する英語の例文（11）、（13）、（15）、（17）をみると、英語の過去形では、同様の推論は得られず、現在の状態を表す際に、過去形を使うと語用論的に不適格となる。特に例文（13）は、現在、地球は青いという人々の世界知識と一致しないと解釈され、非常に不適格性の強い文となる。これは、一つ目の推論、つまり過去の状態は現在には当てはまらないという推論が、英語の過去時制の状態文では強く働いているためである。持続の推論そのものは、言語使用とかかわりなく普遍的に人間が生活のなかで行う推論であり、英語でも可能であるが、英語の過去時制の状態文では、一つ目の推論、つまり現在に状態が当てはまらないという推論が非常に優勢であるため、そのような状態の持続の推論を前提とした用法は難しいことがここから観察される⁶⁾。

- (10) 今日は休みだった。（話者は朝、起きたばかり）
 (11) Today is/#was a holiday. （ 〃 ）
 (12) 地球は青かった。
 (13) The earth is/#was blue.
 (14) あなたにお会いできてよかった。（話者が聴者に会った直後）
 (15) I am/#was glad I can/#could meet with you. （ 〃 ）
 (16) 星が見えた。（望遠鏡をのぞきながら。星はまだ見えている。）
 (17) I see/#saw stars. （ 〃 ）

繰り返し強調すると、上記の「た」文に見られる推論は、「過去にある状態が存在すれば、談話の文脈のなかでほかに相反する要素がなければ、その状態は持続し続ける」という持続の推論（McDermott 1982）に基づいている。つまり、たとえば、人が谷底に石を落としたとすると、その石は谷底にあるという状態が生じる。そして、ほかにその事実と反する、あるいはその状態を終わらせるような事実についての情報や知識（誰かが拾った、あるいは、洪水で流された、

など)がなければ、その人は、しばらくしてもその石は谷底にあるだろうと推論する。つまり、これは言語や文法項目とは独立して、人々が世界知識に基づいて日常生活で大変頻繁に行う推論である。そのため、英語の過去の状態文でもその推論を阻む情報がなく、支持する情報があれば、語用論的に可能なはずである⁷⁾。

しかしながら、上記のいずれのタイプの推論も特にそれに相反する文脈や状況についての情報がなければ自動的に行われる推論であり、Levinson (2000) の意図するところの Generalized Conversational Implicature (GCI) に相当するデフォルト推論であると考えてよい⁸⁾。つまり、上記の日本語の「た」の例文 (10), (12), (14), (16) については、さらに付加される特別な状況についての情報 (例えば、予定が変更になった、地球全体が干からびてしまった、など) がなければ、現在の状態であるという解釈が自動的に行われる。一方、上記の英語の例文 (11), (13), (15), (17) の語用論的に不適格とされている過去時制の使用についても、その状態は過去のことであり、もはや現在の状態ではないという解釈が自動的に行われるために、それは現在の状況であるという知識が話者と聴者にあるときには語用論的に不適格となる。

しかし、ここでの問題は、同じ過去形でありながら、英語と日本語の過去の状態文では、正反対のデフォルト推論が誘発され、好まれる解釈に違いが生じ、それが語法の差となって現れていることである。なぜこのような違いが生じたのか明らかにする前に、まず、この二つの推論が起こる仕組みを Grice (1975) の会話の原理を応用した Levinson (1983, 2000) の Q-Principle (the Principle of Quantity: 量の原理) と I-Principle (the Principle of Informativeness: 情報提供の原理)、あるいは Horn (1984, 2001) の用語では Q- (based) implicature と R- (based) implicature を適応して明らかにしてみたい⁹⁾。

まず、例文 (11), (13), (15), (17) のような、英語の過去の状態文に見られる推論は、「過去の状態は現在に当てはまらない」という推論であった。これは、Grice (1975) の量の格率 *i* に基づいている。量の格率 *i* とは「会話のやりとりで当面の目的となっていることに必要とされるだけの情報を提供するように心掛けること」(Levinson 1983, 安井, 奥田 1991 の訳による) というものである。聴者は話者がこの量の格率 *i* に従っていると想定し、聴者は話者による発話は必要な情報をすでに含んでいると考える。もしも他に必要な情報があれば、その情報を含んだ別の表現があるのだから、話者はそちらを使うはずであると考え。そして、話者はそうしなかったので、聴者は、必要な情報は発話にすべて含まれていると考え、それ以上の情報を推論して付け加えて解釈しない。これが Q-Principle である。

これを英語の過去時制の状態文の解釈に当てはめると、「英語では、現在完了形を使用して過去の状態が現在にも持続していることを表現できる。量の格率 *i* に従って、もしも過去の状態が現在に当てはまるなら、その表現手段があるのだから、話者はそうしたはずだ。しかし、話者はそうしなかった。だから、過去の状態は現在には当てはまらない」と推論する。例文 (13) の過去時制に使用についても、過去の状態が現在まで持続しているなら、例文 (18) のように現在完了で表現することができるにもかかわらず、話者は過去時制を使った。過去時制が会話で必要な情報を満たしているはずである。ゆえに、「地球は青い」という状態は現在には当てはまらないという推論となる。このような推論を Q- (based) implicature (Horn 1984, 2001, Levinson 2000) という。この推論は、聴者の世界知識や文脈に反する推論であったとしても、

デフォルトで引き起こされるため、記述された状態が現在も継続しているという知識がある場合、過去形の使用は語用論的に容認度が低くなる。

(18) The earth has been blue.

二つ目の持続の推論は、Griceの量の格率iiによって生ずる。量の格率iiとは「必要以上に多くの情報を提供しないこと」というものである。聴者は話者がこの格率を守っていると想定し、必要な情報のみを提供していると考える。つまり話し手が提供しなくても聞き手が推論する情報は提供する必要はないとして提供しない。これを話者の最小化の格率 (Maxim of Minimization) という。聞き手は話し手が最小化の格率に従っているという前提で、必要最小限の情報を含む発話に対して、推論によってより詳細な情報を加えて解釈する。例文(10)では、聞き手は、過去の予定で「今日は休みだった」なら、現在については述べていないが、特に変更がなければ、持続の推論により、過去の状態は現在も持続し、「今日は休みである」と推論する。例文(16)では、発話後、会話の場面で、星が見える状態の持続に反する新しい要因や情報の更新がなければ、過去形で表された状態は続いているだろうと聞き手は推論する。例文(12)と(14)でも同様の推論によって、過去だけではなく現在にも持続している状態として解釈される。このような推論を I-implicature (Levinson 2000) または R-based implicature (Horn 1984, 2001) と呼ぶ。

さて、Griceの量の格率iとiiは互いに相反した格率であり、それに基づく上述の推論、つまり Q-implicature と I-implicature も、一方は過去の状態は現在には持続していないという推論を、他方は過去の状態は現在に持続しているという推論を導き、まったく相反する語用論的解釈を生ずる。次節では、英語と日本語の過去時制の状態文で、どうしてこのような相反する推論、およびそれに伴う解釈が好まれるのか、Horn (1984, 2001) の Scalar 分析を応用し、日本語と英語の時制・アスペクト構造の違いから明らかにする。

3. 時制・アスペクト体系の Scalar 分析

Q-implicature は、ごく簡単には、二つ以上の主張の強さの異なる表現は scale を形成し、その中の、より弱い表現を選択したときに生ずるとされる (Horn 1984, 2001, Levinson 2000)。典型的な Q-implicature の例は (19) に見られる。(19) では、「全部のりんごは食べていない」という推論が第一文で生じ、後続文でその推論が打ち消されている。

(19) He ate some apples. In fact, he ate all of them.

(20) He ate all apples. → He ate some apples. (all→some)

(20) に示すように「全て (all) のりんごを食べる」ことは「いくつか (some) のりんごを食べる」ことになり、前者は後者を意味論的に含意 (entail) する。このような意味論的含意 (entailment) 関係が成立する二つの命題の対を順位付け、含意するほうを上位メンバー (ある

いは強い主張命題), 含意されるほうを下位メンバー(弱い主張命題)とすると, 下の(21)のように scalar pair (対)を成すとされる。そして, その対の下位メンバーの表現(some)を選択すると, 上位メンバー(all)ではないという Q-implicature が誘発される(Horn 2001)。Levinson (2000)はこのような意味論的含意の scale (entailment scale, または Horn scale と呼ばれる)を成す例として, 数量詞 < all, most, many, some >, 接続詞 < and, or >, 法 < necessarily, possibly >, < must, should, may >, 副詞 < always, often, sometimes >などを挙げている。

(21) < some, all >

さて, このような scale は英語の過去形と現在完了形文の意味にも当てはまる。例文(22a)の現在完了の文は(22b)の過去形の文を意味論的に含意する。つまり, 過去から今まで学校にいたことは, 過去に学校にいたこととなり, a は b を意味的に含意する。よって, (23)のような scalar pair が成立する。つまり, 英語の現在完了は, 過去の事象と現在の状態を談話に導入し, 他方, 過去時制は過去の事象だけを導入するため, 現在完了形文は, 同じ過去の事象を導入する過去時制文を意味的に含意する。そして, この scalar pair の中で上位メンバーの現在完了形という選択肢があるにもかかわらず, 下位メンバーである過去形を選ぶことで, 過去の状態は現在に当てはまらないのだという Q-implicature が生じる。

(22) a. I have been in school. → b. I was in school.

(23) 英語: <the past, the present perfect>¹⁰⁾

次に日本語の過去と現在完了について, 英語と同様, scalar pair が成立するかについて検討したい。日本語で現在完了形に相当する形式は「ている」である。しかしながら, 日本語の状態記述を担う状態動詞や述語形容詞は「ている」との共起性が大変低い。例文(24)と(25)は状態動詞と「ている」, (26)と(27)は述語形容詞と「ている」が共起しないことを示しており, これらの多くの状態文では, 過去形と対となる現在完了形文が欠けており, 上記の(22)~(23)でみられたような, scalar pair を形成することができない。

(24) 財布があった /* あっている。

(25) 私は学校にいた /* いている¹¹⁾。

(26) 地球は青かった /* 青い+ている。

(27) お会いできてよかった /* よい+ている。

一方, つぎの(28)と(29)が示すように, 「見える」や「聞こえる」のような知覚を表す状態動詞は「ている」と共起することができる。

(28) 星が見えた / 見えている。

(29) 物音が聞こえた / 聞こえている。

しかし、たとえ共起しても、「ている」は現在進行形と完了の両方の解釈をゆるす漠然性 (vagueness) を持っているため、現在の時点では記述された事象が完了しているとは限らず、(30) のように「ている」文は必ずしも過去の事象を含意しない。さらに、厳密には「ている」の時制は非過去 (「る」) であり、例文 (31) にも見られるように「ている」は未来の時点で完了している事象の解釈も含むため、(32) に示したように意味論的含意関係は成立しない。

(30) *手紙を書いている → 手紙を書いた

(31) 明日の午後には、富士山が見えている。

(32) *見えている (非過去以前の事象, 非過去の状態) → 見えた (過去の事象)。

つまり、日本語の時制・アスペクト体系では (33) のように過去形と現在完了形の scalar pair はそもそも成立しないということになる¹²⁾。つまり Q-implicature の誘発要因である scalar 関係が日本語の「た」については欠けているということになる¹³⁾。

(33) 日本語 : <過去形, -->

さて、英語の過去形の状態文では Q-implicature が強く、日本語の過去形の状態文では I-implicature に基づく解釈が優勢であることは 2 節で論じたとおりである。先にも論じたように I-implicature で得られる持続の推論は広く人々の生活の中で使われている推論で、英語の過去形の状態文においても、その推論は Q-implicature と同様に、生じることが一見可能なはずである。また、日本語の過去の状態文においても、scale に誘発された Q-implicature がなくとも、Grice の量の格率 i に基づいて、過去の状態文を字義どりに解釈し、必要以上の解釈を加えまいとする推論をすることも可能ではないのかとも思われる。しかし、英語では、Q-implicature、日本語では、I-implicature がデフォルト推論として多くの過去形文の解釈が定着していることは上に見たとおりである。

Levinson (2000) によると、Q-implicatures と I-implicatures では Q-implicature に優先順位があり、I-implicature は Q-implicature が抑えられて生じないところで可能となる¹⁴⁾。このことを上述の日本語と英語の時制・アスペクト構造の scalar 分析に当てはめてみると、なぜ推論傾向の違いが生じたかは明らかである。以下に比較のため、両言語の scalar pair をもう一度あげる。

(34) 日本語 <過去形「た」, -->

英語 < the past, the present perfect >

つまり、(34) から分かるように、日本語では、過去形「た」を下位メンバーとする scalar pair が成立せず、「た」の使用の際に、対の下位メンバーの選択によって誘発される Q-implicature が構造的に誘発されない。それゆえ、I-implicature が生じやすいと考えられる。つ

まり、過去の状態は現在には当てはまらないという Q-implicature が抑えられ、I-implicature として過去の状態文から誘発される過去の状態が持続しているという持続の推論が起りやすくなる。持続の推論は、現実世界で状態や状態変化が存在するときデフォルトで現れる推論であり、最も簡単な推論でもあるので、会話の状況や文脈、世界知識がその推論を支持する場面で頻繁に使われることによって、それに基づく解釈を前提にした用法が日本語では使われるようになり発達したと考えられる。

それに対して、英語の過去形は、scalar pair の下位メンバーであるので、Levinson の優先順位に基づき、その選択は、聞き手にデフォルトとして Q-implicature を誘発する。ゆえに、どのような場合でも Q-implicature がまず自動的に生じ、過去の状態が現在持続していることが明らかな (13) のような例でも、過去形を用いると聞き手の解釈では Q-implicature が優先されてしまい、I-implicature に基づく持続の推論を阻んでしまうために、語用論的に不適切となる。

このように英語と日本語では、その時制・アスペクト体系の違いにより、構造的に成立する scalar pair に差が生じ、そこから体系的に誘発される推論のタイプにも違いが生じた。そして、より頻繁に起こる推論パターンに基づく解釈がそれぞれ用法として定着したと考えられる。

むすび

本稿では、日本語の「た」が英語の過去形に相当する過去時制であることを明らかにした上で、その語用論的な解釈の違いが異なる推論パターンに基づくことを示した。さらに、その推論パターンの違いについては、Horn の scalar 分析を、両言語の持つ時制・アスペクト体系の分布構造に応用し、そこから構造的に誘発される推論の違いであることを示した。これまで、英語の過去形文とは異なる解釈や語法を持つために、日本語の「た」は本当に過去時制であるのかという問が立てられながら、明確な基準でその問いに答える研究がなかった。この論文では、「た」が過去時制であることを、その基準とともに示しただけではなく、両言語でそのような異なる解釈が生じる構造的な仕組みを明らかにした。そして、言語間で同じ意味を持つ文法項目であっても、その言語の構造の体系的な違いに応じて、好まれる解釈やそれに伴う用法も異なってくるという一つの好例を示した。

注

- 1) 語用論的に微妙な適切性の判断は、文法的な判断と比べて、文脈にも左右され、多少英語話者によって異なるが、ここでは多くの話者の傾向として論じている。
- 2) ここでは従属節内の「た」や丁寧表現の「た」については論じない。
- 3) 現在完了形の意味分析について、もう一つの代表的な分析として、時間関係説があるが、時間関係説では過去形との意味論的区別をすることが実質的に不可能である。完了形の意味の時間関係説の問題点については、詳しくは Nishiyama and Koenig (2004), Nishiyama (2006b) を参照のこと。
- 4) 英語の “still” の用法には、日本語の「まだ」とは異なる制限があるが、ここでの議論に重要性を持つものではない。詳細は Michaelis (1998) を参照のこと。
- 5) ここでは、「た」が法助動詞的なモダリティの意味を持つ可能性については論じていないが、状態性の基準を満たさないことで「た」が法助動詞の意味を持つ可能性も同時に排除される。たしかに、過去

時制の語用論的な解釈において、モダリティ的解釈を帯びることはある (工藤 1995, 井上 2001)。しかし、意味論的にはモダリティ, あるいは法助動詞文は状態性の基準を満たし, 状態であると考えられる。ゆえに, 上で論じたように, 状態性の基準を満たさない「た」は, モダリティの意味も持たないと考えるのが妥当である。紙幅の都合上, これ以上モダリティについては論じない。

- 6) これらの「た」文の解釈について, とくに例文 (16) について, coercion (Egg 2005) による, 主動詞の inchoative (起動相動詞) への再解釈の可能性は, 状態動詞と過去形の間で coercion を誘発する共起制限や意味論的不整合が見当たらず, 考えにくい。
- 7) Klein (1994) の 22 ページの例文を参照のこと。
- 8) Generalized Conversational Implicature (GCI) とそれ以外の Implicature, つまり Particularized Conversational Implicature (PCI) を明確に分けることができるのかどうかは議論の余地があるが, この問題についてはここでは論じない。
- 9) この implicature という用語には「含意」, Q-implicature と R-implicature には「Q 推意」, 「R 推意」などが一般的な日本語訳として使われているが (Levinson 1983 の安井, 奥田 (1991) 訳; Levinson 2000 の田中, 五十嵐 (2007) 訳), 本稿では人物名も含めて, 重要な概念はできるだけ参考文献の原文を尊重し, 英語のアルファベット表記で統一している。
- 10) Harnish (1976) の観察をもとに Levinson (2000) では, <PRESENT, PAST> という scalar pair の可能性について論じている。Levinson は, 現在に導入される事象は, 必然的に発話の瞬間より前の時間 (つまり過去の時間) を含むので, 過去を含意することができ, 含意関係が成立するのではないかと論じる。明確な対照をなす対の一方を選ぶことで他方が否定されるという推論はありうるかもしれないが, この対の間に意味論的含意関係が成立すると言うことはできない。

現在時制で導入される事象は, 出来事ではなく, 現在時制と共起性のある状態であると考えられるが, その状態の部分として過去の状態部分を含むと意味論的に主張することはできない。状態はある時間に成立するということではできるが, その前後にも成立しているというのは, 厳密には, 状態の非限界性 (atelicity) に基づいた推論, つまり解釈にすぎない。意味論的には過去の状態を含むわけではないので, 意味論的含意関係は成立しない。
- 11) 関西方言では, 「いる」 + 「ている」の短縮された形, 「いてる」がしばしば可能である。
- 12) 「ている」の意味およびその漠然性 (vagueness) については, Nishiyama (2006a) を参照のこと。
- 13) 日本語で現在完了形に近い意味を表す形式として「～ことがある」があるが, 英語の完了形の解釈のなかでは, 経験の解釈のみに対応し, 結果や継続, 完了の解釈を許さないで英語の現在完了形には相当しない。
- 14) Levinson (2000) はこの二つの implicature の間の優先順位を観察的事実としているが, その根拠については論じていない。根拠として考えられることは, まず, Q-implicature は言語の体系的構造, つまり, 当該言語の各項目の分布状況に基づいて誘発され, 一定の解釈を生み出すので, 発話された言語情報から, より直接的に推論されると言える。一方, I-implicature は, より文化的なものや世界知識を参照して推論され, 必ずしも言語情報に依存した推論ではない。それゆえ, Q-implicature のほうが, 発話文の言語情報からより直接的に推論され, より言語に内在的であるので, 言語の解釈の際に, 優先的に起こるのではないかと考える。Levinson によれば, 発話文の構造や語句に直接関わって誘発されるもう一つの推論, M-implicature も, やはり I-implicature より優先されるとしており, このことも上述の根拠を示唆している。しかし, この問題については, 紙幅の都合上, 本稿ではこれ以上論じない。

参考文献

- Bertinett, Pier Marco. Statives, progressives, and habituals: analogies and differences. *Linguistics* 32. 391-423. 1994.

- De Swart, Henriëtte. Aspect shift and coercion. *Natural Language and Linguistics Theory* 16. 347-385. 1998.
- Dowty, David R. *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht ; Boston: D. Reidel Pub.Co, 1979.
- Egg, Markus. *Flexible Semantics for Reinterpretation Phenomena*. Stanford: CSLI Publications, 2005.
- Galton, Antony. *The logic of aspect: an axiomatic approach*. Oxford: Oxford University Press, 1984.
- Grice, Paul. Logic and conversation. *Syntax and semantics 3: Speech acts*, (eds.) Peter Cole and Jerry Morgan, 41-58. New York: Academic Press, 1975.
- Harnish, Robert M. Logical form and implicature. *An integrated theory of linguistic ability*, (eds.) T.Bever, J.J.Katz, and T.Langendoen. Oxford: Oxford University Press, 1976.
- Herweg, Michael. A critical examination of two classical approaches to aspect. *Journal of Semantics* 8. 363-402. 1991a.
- Herweg, Michael. Perfective and imperfective aspect and the theory of events and states. *Linguistics* 29. 969-1010. 1991b.
- Horn, Laurence R. Toward a new taxonomy for pragmatic inference: Q-based and R-based implicature. *Meaning, form and use in context: Linguistic applications*, (ed.) Deborah Schiffrin, 11-42. Washington, DC: Georgetown University Press, 1984.
- Horn, Laurence R. *A Natural History of Negation*. Stanford: CSLI Publications, 2001.
- 井上 優「現代日本語の「た」」「た」の言語学」(編) つくば言語文化フォーラム。東京：ひつじ書房，2001。
- Ismail, Haythem O. *Reasoning and Acting in Time*. State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation. 2001.
- Kamp, Hans, and Uwe Reyle. *From Discourse to Logic, Part 1, 2*. Dordrecht: Kluwer Academic Press, 1993.
- 金子亨『言語の時間表現』東京：ひつじ書房，1995。
- 金水敏「いわゆる「進行態」について」『築島裕博士古稀記念国語学論集』東京：汲古書院，1995。
- Klein, Wolfgang. *Time in Language*. London: Routridge, 1994.
- Levinson, Stephen C. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press, 1983.
- Levinson, Stephen C.『英語語用論』安井稔，奥田夏子訳，東京：研究社，1990。
- Levinson, Stephen C. *Presumptive Meanings*. Cambridge: MIT Press, 2000.
- Levinson, Stephen C.『意味の推定』田中廣明，五十嵐海理訳，東京：研究社，1997。
- McDermott, Drew. A temporal logic for reasoning about processes and plans. *Cognitive Science* 6. 101-155. 1982.
- Michaelis, Laura. *Aspectual grammar and past-time reference*. London, New York: Routledge, 1998.
- Mittwoch, Anita. Aspects of English aspect: On the interaction of perfect, progressive and durational phrases. *Linguistics and Philosophy* 11, 203-254. 1988.
- Nishiyama, Atsuko. The meaning and interpretations of the Japanese aspectual marker *-te-i-*. *Journal of Semantics* 23. 185-216. 2006a.
- Nishiyama, Atsuko. *The Semantics and Pragmatics of the Perfect in English and Japanese*. State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation. 2006b.
- Nishiyama, Atsuko and Jean-Pierre Koenig. What is a perfect state? *WCCFL* 23, 595-606, University of California, Davis. Cascadilla Press, 2004.
- Ogihara, Toshiyuki. The ambiguity of the *-te iru* form in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 7. 87-120. 1998.
- Parsons, Terence. *Events in the Semantics of English*. Cambridge: The MIT Press, 1990.
- 鈴木康『古代日本語動詞のテンス・アスペクト』東京：ひつじ書房，1992。

英語と日本語の過去形の語用論（西山）

Ter Meulen, Alice G.B. *Representing Time in Natural Language*. Cambridge: The MIT Press, 1995.

寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味 II』東京：くろしお出版，1984。